

# 境界の鳥

## ——ニワトリをめぐる信仰と民俗——

小池 淳 一

### 要 旨

本稿は日本の民俗文化におけるニワトリをめぐる伝承を素材にその特徴を考察するものである。ここではニワトリをめぐる呪術や祭祀、伝説を取り上げ、民俗的な世界観のなかでのニワトリについて考え、その位相を確認していく。それによって文芸世界におけるニワトリを考究する前提、もしくは基盤を構築する。まず、呪術としては水死体を発見するためにニワトリを用いる方法が近世期以降、日本各地で見いだせることに注目した。生と死、水中と陸上といった互いに異なる世界の境界でニワトリが用いられたのである。続いてニワトリが関わる祭祀として、禁忌とされたり、形そのものが神聖なものとなれる場合があることを指摘した。さらにその神格としても移動や境界にまつわるとされることが述べた。最後に伝説においても土中に埋められた黄金がニワトリのかたちであったり、年の替わり目にニワトリが鳴いて黄金の存在を示すといった例が多く見いだせることを確認した。

総じて、ニワトリをめぐる伝承の多くは移動や変化に関わり、またその存在は特定の時空でくり返し、想起されるものであった。まさにニワトリは境界をめぐる伝承を集約する鳥なのであった。こうした生活世界における伝承を改めて意識することで、かつてのニワトリに対する感覚を思い起こし、境界という時空が持つ可能性と潜在的な力を再認識することができよう。



## はじめに

ニワトリは人間の生活のなかで古くから身近に棲息し、注意・利用され、さまざまな伝承を生みだしてきた。それはそのまま日本の文芸世界にも投影され、物語や和歌にもニワトリが登場している。<sup>(1)</sup> 本稿ではそうしたニワトリをめぐる呪術や祭祀、伝説を取り上げ、民俗的な世界観のなかでのニワトリの特徴について考え、その位相を確認していく。それによって文芸世界におけるニワトリを考究する前提、もしくは基盤を構築することとしたい。

最初にニワトリをめぐる民俗研究をふり返っておこう。

柳田國男はその初期の伝説研究のなかで、長者伝説や異界の富に連関するモチーフとして、黄金とニワトリの形象との関係に早くから注目していた。柳田には『山島民譚集』（一九一四年）に収められるために執筆された「黄金の雞」という論考がある。<sup>(2)</sup> そこでは近世の考証随筆や地誌類から資料を博搜し、財宝を示唆する伝説になぜニワトリが登場するかについて考察を進めている。次いで南方熊楠が後に『十二支考』として知られるようになる一連の十二支をめぐる考究のなかでニワトリにもふれている。<sup>(3)</sup> 類似の検討は宮武省三によっても行われており、ここでもニワトリに関する多様な伝承を取り上げて論究している。<sup>(4)</sup> こうした民俗研究の初期から、伝説や年中行事などの領域でニワトリの占めてきた位置については一定の注目がなされてきたことがわかる。特に柳田の作業は近世の龐大な考証随筆の類に見出すことのできるニワトリの伝承態についての指摘が行われており、資料集成としても大きな意味を持っているといえよう。実際の生活のなかにおけるニワトリについては早川孝太郎の報告「雞の話其他」<sup>(5)</sup> もあり、近代に至るまでの農村生活におけるニワトリの記憶が記録化されている。

その後のニワトリに関する民俗研究は柳田が提起した視点に添いながらも、資料の面で充実していく傾向にあった。古典文学をも材料とする高崎正秀「木綿附鳥」<sup>(6)</sup>は、古代以来のニワトリをめぐる伝承や意識に関する史的な展開に大きな示唆を与えてくれる。また伝説を幅広く取りあげた大藤時彦の「金雞伝説」<sup>(7)</sup>も柳田の視座を継承し、伝説という形式で表現されたニワトリのイメージについて検討を加えている。

このように文献記録を材料とした研究にはじまり、各地からの調査報告が加わってニワトリの伝承に関する考察は順調に発展してきたといえよう。本稿ではこうした先行研究の蓄積に資料面では大きく依拠しながら、ニワトリの伝承が形成されていく過程や原因について考察を加えてみたいと考える。ごく大まかにニワトリが日本の民俗文化においては境界に関わる鳥であることは先行研究から明らかである。そうした伝承がどのような契機や条件のもとに顕現し、機能してきたかについて、さらなる検討を加えてみるのが本稿の目的である。

ここでは最初にニワトリを用いたまじないを取り上げ、次にニワトリと神との関係にまつわる伝承を検討する。最後にニワトリが登場する伝説についても考察して、この鳥と境界との関係を改めて明らかにし、そうした位相とその形成過程に関する見通しを獲得することをめざしたい。

## 一 ニワトリのまじない―水中の死者を探す呪法

青森県下北郡脇野沢村瀬野（現むつ市）では、海で船が転覆などして遭難者が出た際、なかなか発見できない場合には船にメンドリを乗せて遭難場所へ向かう。船中のニワトリは溺死者が沈んでいるところに着くと、けたたましく鳴くと言われていた。またメンドリの鳴き声を聞かせると遺体が海中から浮上してくるとも言われる。同じく下北半

島の太平洋に面する東通村尻屋では、海での遭難事故が起きた際にはまず、浜で火を焚く。この火は「仏様を迎える火」だとされる。あるいは事故が発生した場所へ船で出かけていき、手拭いなどの布を海に投げてやると死者が浮上するともいう。それでも遺体が発見できない場合は、船にメンドリを乗せていくと、遺体の沈んでいるところで鳴くものだと伝えていた。<sup>(8)</sup>ニワトリには海中の様子を感知する不思議な能力が備わっているものと伝えられていたのである。また遠く離れた静岡県沼津市の沿岸部でも「子どもが海に流されて亡くなったとき、鹽に鶏を入れて流す。鶏が鳴いたところに死体が出る」といつた。<sup>(9)</sup>という聞き書きは近年でも得られており、こうしたニワトリを利用した死者搜索のまじないは沿岸各地にかなり広く分布しているものと思われる。<sup>(10)</sup>

さらに、こうした感覚と呪法とがどこまでさかのぼるものか、かならずしも判然とはしないが、さしあたり、いくつかの資料を挙げることができる。

宝暦六年（一七五六）跋の黒川道祐『遠碧軒記』（下之二）「禽獸魚鼈」の項には「…海川へ投じて死して、その死骸のある所しれずには、鶏を舟にのせてこぎありけば、その死人の死骸ある所にては鶏鳴す、夫によりてとりあぐる法なり。」<sup>(11)</sup>とある。小倉学は加賀藩一〇代の藩主、前田重教の略年譜『泰雲公御年譜』の明和七年（一七六五）五月一日の条に「同十一日、小松洪水、御城三之丸之内橋辺子共壱人致溺死、死骸相尋候得共相知不申候二付、舟二鶏を載せ出申候、死骸有之所二而ハ鳴申候由二付、其うたひ申を見物之ため、大勢橋之上に集り居候処、此橋久敷御修覆無之、朽居申候処、大勢立込居申二付、真中より折込、集り居申者三十七八人不残川へ落申候…（後略）」とあることに注目する。小松城の橋の上で、水死体の搜索が鶏を用いて行われるのを橋の上から見物していたところ、橋が落ちて、多くの溺死者をさらに出した事件の記事であるが、この記事を引いて、さらに後年（文化一四年・一八一七）の『寢覚の堂』などにも「鶏を水上に渡せば、死骸有処にて羽たきし、啼といへる俚諺」とあることから、一八世紀

後半にはこうした事実があり、俚諺―伝承と解してもよいだろう―ともなっていたことが判明するという。<sup>(12)</sup>

安永六年（一七七七）から刊行がはじまった谷川士清『倭訓栞』の後編卷之十四「にはとり」の項には、「〇水に溺れたる死骸をたづぬるには舟にのせて浮むれば尸骸あるところにて時をつくるといひ伝へたり諏訪の湖にても沈没の人あれば此法をせりとぞ」<sup>(13)</sup>とあつて、水に溺れた死体を探すには舟に（ニワトリを）乗せて浮かべれば、死体のあるところでトキを作る（鳴声をあげる）と言ひ伝えていて、諏訪湖でもこれを行つたとあつて、内水面である信州の諏訪湖においてもニワトリを用いて水中の死者を探す呪法が行われていたことがわかる。

このことに関連して鈴木牧之の『北越雪譜』（初編卷之中）（天保六年・一八三六）には雪崩による行方不明者の捜索に際して、鶏が用いられたことが記されている。

…かの老人よし／＼所為<sup>しかた</sup>こそあれとて、若き者どもをつれ近き村にいたりて、雞<sup>にはとり</sup>をかりあつめ、雪類<sup>なだれ</sup>の上にはなち餌<sup>ゑ</sup>をあたえつゝおもふ処へあゆませけるに、一羽の雞羽たゝきして時ならぬに為<sup>な</sup>晨<sup>とぎ</sup>ければ、餘<sup>ほか</sup>のにはとりもこゝにあつまりて声<sup>こゑ</sup>をあはせけり。こは水中の死骸をもとむる術なるを、雪に用ひしは應變<sup>おうへん</sup>の才なりしと、のち／＼までも人々いひあへり。

すなわち、雪崩で人が行方不明になつた時にある老人が、こういう時には方法があるのだ、と言つて、若者を近隣の村に連れていき、ニワトリを集めさせ、雪崩の上に放ち、エサを与えて自由に歩かせた。すると一羽のニワトリが時刻でもないのに鳴き声をあげ、他のニワトリもそれに続いた。このことにより死者を発見することができた。これは水中の死体を発見するための技術であるが、それを雪に用いたのは優れた才覚であつたとのちのちまで人々は話したといふのである。<sup>(14)</sup>

これらによれば、近世期に水中の遭難者を探る方法は広く知られており、雪崩による遭難の場合にも応用されたと

いうことになる。

陸上で生活するわれわれにとって水中や雪中は異界であり、その様相については容易に知りがたいものであった。それをうかがうにはニワトリの力を必要とし、またニワトリはトキを告げる、すなわち鳴くことによって、その能力を発揮したのである。

これは水中と陸上との境界においてニワトリが能力を発揮するという知識であるとともに、生の世界と死の世界との境界をニワトリの鳴き声が示すということでもある。ニワトリは、その声によって現世と他界、生と死の境界を表象する存在なのであった。

## ニニワトリと神

島根県松江市の美保神社にはニワトリにまつわる奇妙な伝説が知られていた。この伝説では、この神社の神が毎晩対岸の姫神のところに通っていたが、ある時、ニワトリが間違えて鳴いたために慌てて帰る途中で怪我をした、という。そのために美保神社の神はニワトリを憎むようになったといい、美保関ではニワトリを飼わず、卵も食べないという禁忌があったとい<sup>(15)</sup>う。

ここでのニワトリは夜明けを告げるという当然の行為をしたにもかかわらず、神から憎まれるという結果を招いている。実はこの伝説は、美保の神に関してニワトリの禁忌が先に存在し、それを説明するために作り出されたもののようにも思われる。本来はニワトリと神とが何らかの特殊な関係にあったこと、あるいはニワトリに神との深い関係があったことをこの伝説は示すものらしい。

つまり、ここでのニワトリは夜と昼とを分ける、まさに境界を示す鳥であるとともに、神と人との接点を示す鳥でもあったことがうかがえるのである。ニワトリをめぐる禁忌の意識は、この地での神とその意思とを意識させるものではなかっただろうか。だとするとニワトリと神との関係はかなり親しいもので、その形や名前にも神との親和性を見出すことができるかもしれない。

それを暗示するかのような例として「雞化石」という石にまつわる伝承がある。木内石亭の『雲根志』（卷之三）（安永二年・一七七三）享和元年・一八〇一）の記事である。

筑前の國香椎濱に雞石あり土俗伝へいふむかし此濱へ何方ともなく鶏来りて稼穡をあらせしをもて近郷の百姓あまたあつまりて彼鶏を狩て殺さんとあらそへり時に雲水の僧来りて罪をゆるし鶏をわれにあたへよと乞どもゆるさずして終に殺せり其時旅僧和哥ありいにしえも鶏の玉のむためしあり罪をばなどかわれにあたへぬ死たる鶏たちまち石と化せりと今祠に封じてこれをまつる其社の邊をたづねれば小さき鶏のかたちせる自然石を拾ふと予いまだ見ず<sup>(16)</sup>

百姓たちによつて殺されたニワトリを哀れんだ旅の僧侶が和歌を詠んだところ、死んだニワトリが石となり、その祠の周辺では小さなニワトリの形をした石を拾うことができたという。これはニワトリとそのかたちが何らかの神性を帯びたものとして感じられていたことを示すものといふことができる。

一方、神の名とニワトリとの関わりとしては、福島県相馬地方におけるニワタリとかミワタリ、あるいはニワタシなどと呼ばれる神が注目される。これらの多くは小祠として祀られてきた。漢字では庭渡、荷渡、御渡と書くことが多いが、いずれも当て字で、はつきりとした表記は不明であり、その神格も明確ではない。実際の暮らしのなかでは、水を配分する（もたらしてくれる）神、渡海安全の神、あるいはニワトリの神で咳を鎮めてくれるなどと伝えられて



いた。

例えば、飯館村関沢の庭鳥大明神の祠は田んぼ近くの丘の上にあり、昔、ニワトリが何かに追われてここに来て死んだのだと伝えている。風邪のときにせきこんで息を吸う音がニワトリの鳴くのに似ているといい、咳の信仰がある。新地村小川の二羽渡という祠は白鳥が飛んできて止まったのを祀ったといい、咳によい神だといって、二羽のニワトリを描いて納めるという<sup>(17)</sup>。ニワトリとそれに類する神はかつては岩手・宮城・福島あたりになりに多く存在し、元々の意味は比較的早くに忘れ去られたらしい。

注目すべきなのは、ニワタリ、ミワタリ、ニワタシという名称さえも流動的なこの神が、ニワトリという鳥に結びつけられているだけではなく、水の配分という境界的な意味を付与されていたり、渡海を安全に守護するという境界を移動する場面で信仰される神であるという点である。さらに咳を鎮めるという考えも、ニワトリの鳴き声との類似ばかりではなく、人間の身体の内と外とが咳という症状と結びつけられているということができるだろう。ニワトリとそこから展開した神格はいくつもの面で境界を意識させるものとなっているのである。

### 三 ニワトリの伝説

松尾芭蕉の『奥の細道』の平泉の記述に「三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡ハ一里こなたに有。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す<sup>(18)</sup>」とある「金鶏山」は、この地に藤原秀衡が黄金のニワトリを埋めたという伝説に基づく名である。東北地方にはこうした黄金のニワトリにまつわる伝説も多く伝えられていたことが知られている。

例えば松浦静山の『甲子夜話』（続卷一二）には大槻玄沢の話として、

奥州栗原郡三の戸畑村の中に鶏坂と云あり。此所よりさきの頃、純金の鶏を掘出しけることあり。其故を尋るに、この畑村に、昔炭焼藤太と云者居住す。その家の近きより砂金を拾ひ得たり。因て遂に富を重ぬ。故に金を以て鶏形一雙を造り、山神を祭り、炭と俱に土中に埋む。因て其所を鶏坂（ニヤ）と云こと、貞享三年の印本『藤太行状』と云るに載たりと。又文化十五年の四月、その処の農夫砂金を拾はんため山を穿しに、岸の崩れより一雙の金鶏を獲たり。重さ百錢目許（ばかり）にして、山神の二字を刻りつけ有ける。<sup>(19)</sup>と記されている。これは古代における炭焼藤太にまつわる金鶏の伝説が、近世期の出土によって証明されたというものである。

やがて全国各地の民俗調査が進展していくうちに、こうした金鶏伝説は、東北だけではなく、全国各地にあることが明らかになっていった。いくつかその具体例を挙げてみよう。

奈良県宇智郡坂合部村大字相谷の正法寺から半町ばかり隔たった花畑という場所に黄金の鶏が埋めてあり、元日の朝に鳴く。また同郡宇智村には荒坂という所があり、長者が住んでいた。その屋敷の池にかかっている石の橋の下に黄金のニワトリが埋めてあり、元日の朝になると鳴くと言われている。<sup>(20)</sup>京都府大井村金岐の大理塚と呼ばれる塚には尊い王子が生き埋めにされたために、王子の魂が黄金の鳥となつて、毎年正月の元日の朝出て鳴くといふ。<sup>(21)</sup>

さらに信州木曾谷の伝説として、以下のようなものもある。

昔松本平に倉科様と云ふ長者があつた、或年都へ宝競べに行くとして、数多の財宝を馬に積んで木曾街道を上り、妻籠の宿に泊つた晩、三人の強盗があつて途中で此宝を奪はうと企て、其中一名は宿屋に入つて鶏の足を暖め、夜更に時をつくらせてまだ暗い中に出立させた。長者が馬籠峠の山路にかゝり字男垂と云ふ處まで来た時、三人の盗は後から出て来て竹槍で長者を突殺し、宝を奪つて去つた。其時の宝物の中に黄金の鶏が一つ、落ちて川に

流れて男垂の滝壺に入つた。今でも元日の朝は其鶏がこゝで時をつくと云ふ。<sup>(22)</sup>

財宝の一部がニワトリのかたちとなり、それが時をつくり、存在を示すという伝承は何を意味するのであるうか。また徳島県からは次のような報告もある。

徳島県那賀郡桑野村に幅約十五間の川が流れてゐる。桑野川の上流である。むかし六部の姿をした僧が、此村の金満家の何某（名は預かつておく）の許に一夜の宿を求めたところが主人は喜んで宿を貸したまではよかつたが、六部が黄金の鶏と一寸四方の箱に収まる蚊帳を持つてゐることを聞いて、翌日の朝早く出かけた六部の跡をつけ、濁りが淵のところで六部を斬りころした。鶏は羽音をたてゝ飛失せたが、蚊帳は手に入つた。その時の六部の血で、今でも淵の水は赤く濁つてゐる。其家では今にもむした餅をつかぬ。つけば必ず餅に血が混じるのでひき餅をつく。蚊帳は今にもあるさうだ。<sup>(23)</sup>

これは「六部殺し」の類話とみなすことができるものであるが、<sup>(24)</sup>旅僧が所持し、奪われずに姿を消したのが黄金のニワトリであるところに興味深い。これらの伝説に共通しているのは元日に黄金が声をあげるとする点で、財宝を示すニワトリは古い年と新しい年との境界でその存在を主張するということが述べられている。徳島の伝説も餅をめぐる伝承を伴っているところから、この伝説が語られていく場面として、年の替わり目との関わりが推測できる。土中に黄金が埋められる際にニワトリのかたちが選ばれたことは、ニワトリの伝承全体とどう関わるのだろうか。この点は不分明であるが、いったんこの世から姿を消し、時間の境界にあたつてその存在が強調されるというのは、黄金がニワトリというかたちに変化したとされることと関係があるに違いない。あるいは前節でふれた福岡の香椎浜の「雞化石」の伝承のように神性を帯びるかたちなのかもしれない。

また隠されている筈の黄金（のニワトリ）が元日に鳴いてその存在を主張するというのは、こうした境界的な性格

が一年の最も大きな区切りに際して強調され、くり返し想起されてきたということを示している。この点から、ニワトリの民俗における境界性は重層的であることが確認できるのである。

## おわりに

早川孝太郎の愛知県東三河地方からの報告には、ニワトリは庭鳥だから土間にいるもので、竈の神である土公神は、鶏の遊んでいるのを喜ばれるといい、またニワトリが朝起きて羽ばたきして関を作るのは、その日一日の魔性を払うなどともいったらしい。<sup>(26)</sup>このことはかつての日常生活のなかでニワトリが人間とその住まいの近辺にいたことで自ずから境界的な性格や意味を帯びるようになったとも考えられよう。家屋のなかでも内と外との両方の性格を持つ土間という両義的な空間に棲息し、一日を夜と昼とに、鳴き声を上げることで区切ってきたのがニワトリであった。

総じて、ニワトリをめぐる伝承の多くは移動や変化に関わり、またその存在は特定の時空でくり返し思い起こされるものであったらしい。まさにニワトリは境界をめぐる伝承を集約する鳥なのであった。今日ではこうしたニワトリの境界的な性格やそれに伴う象徴性は忘れられかけているが、こうした生活世界における伝承を改めて取り上げることとで、かつてのニワトリに対する感覚を思い起こし、境界という時空が持つ可能性と潜在的な力を再認識することができる。それは人類とニワトリとの関係史に迫る糸口でもある。<sup>(27)</sup>多くの家畜、家禽がこうした民俗的な世界観のなかで境界的な意味を持つことは予想できるが、ここで見てきたようにニワトリに関してそうした伝承が多く結晶しているのは、人間が作り上げようとする文化のなかに自然を取り込むという家畜、家禽そのものの象徴的な志向が、日常的な民俗事象のなかでも繰り返し表現され、受けつがれていくということを示しているといえよう。

本稿ではニワトリの境界という時空を生み出し、表示し、象徴するという性格が、民俗的な世界観のなかで、さまざまなかたちで表出していることを確認した。このことが呪術や信仰世界、伝説をはじめとする説話だけではなく、生活や文芸のなかでどのように展開していくのかが、次の課題として浮き上がってくる。本稿での分析を意識しつつ、その点を引き続き考えていきたい。

〔注〕

- (1) 本稿では生物としてのニワトリを指すものとして、また民俗語彙としてのニュアンスも付加して、鶏・庭鳥・雞などを全てニワトリと表記する。なお、引用文などでは原文のまま用いる。
- (2) 柳田國男「黄金の雞」（関敬吾・大藤時彦編『増補 山島民譚集』、平凡社、一九六九年、二九七―三二〇頁、に収録）。なお、この論考の“発見”の経緯については同書の三九九―四〇四頁を参照されたい。
- (3) 南方熊楠「鶏に関する伝説」（『南方熊楠全集（第一巻）』、平凡社、一九七一年、四一七―四九〇頁。初出は一九二一年）。
- (4) 宮武省三「雞に関する伝説と民俗」（『習俗雜記』、坂本書店、一九二七年、五三―六一頁）。
- (5) 早川孝太郎「雞の話其他」（『民族』一卷一号、一九二五年、一七四―一八一頁）。
- (6) 高崎正秀「木綿附鳥」（『高崎正秀著作集（第七卷）』金太郎誕生譚、桜楓社、一九七一年、八三―九八頁。初出は一九三七年）。
- (7) 大藤時彦「金雞伝説」（『日本民俗学の研究』、学生社、一九七九年、一〇六―一一八頁、初出は一九七二年）。
- (8) 高松敬吉「海難死者への儀礼」（『巫俗と他界観の民俗学的研究』、法政大学出版局、一九九三年）、四〇五―

四一二頁。

(9) 沼津市教育委員会文化振興課編『沼津市史編さん調査報告書第一三集・松長の民俗(民俗調査報告書八)』(沼津市教育委員会、一九九九年)、一九二頁。

(10) 鈴木棠三『日本俗信辞典 動・植物編』(角川書店、一九八二年)、四二八―四二九頁、参照。

(11) 黒川道祐『遠碧軒記』(『日本隨筆大成(第一期一〇卷)』、吉川弘文館、一九七五年)、一一七頁。

(12) 小倉学『水死人の搜索と鶏』(『西郊民俗』一一三号、西郊民俗談話会、一九八五年、四―六頁)

(13) 谷川士清『倭訓栞(後編卷之十四)』(成美堂、一八八七年)、一三ウ頁。

(14) 鈴木牧之『北越雪譜』(原田伴彦・平山敏治郎編『日本庶民生活史料集成(第九卷) 風俗』、三一書房、一九六九年)、一二二頁。

(15) 折口信夫『鶏鳴と神樂と』(『折口信夫全集(第二卷)』、中央公論新社、一九九五年、一六九―一七五頁、初出は一九二〇年)、一七一頁。

(16) 引用は木内石亭『雲根志』(正宗敦夫編『日本古典全集・雲根志』、現代思潮社(覆刻)、一九三〇年)、六五頁に拠った。

(17) 岩崎敏夫『本邦小祠の研究』(岩崎博士学位論文出版後援会、一九六三年)、二三五―二三六頁。

(18) 引用は井本農一ほか校注『新編日本古典文学全集 71・松尾芭蕉集②』(小学館、一九九七年)、九九頁に拠った。

(19) 引用は中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話(続篇Ⅰ)』(平凡社(東洋文庫)、一九七九年)、二九三―二九四頁に拠った。

- (20) 田村吉永「長者と金の鶏」（『郷土研究』二巻三号、郷土研究社、一九一四年）、五一頁。
- (21) 垣田五百次・坪井忠彦『口丹波口碑集』（郷土研究社、一九二五年）、四一―四二頁。
- (22) 林六郎「木曾妻籠より」（『郷土研究』四巻九号、一九一六年）、四四頁。
- (23) 吉川泰人「濁りが淵」（『郷土研究』一卷二号、一九一三年）、五三頁。
- (24) 「六部殺し」については小松和彦『異人論―民俗社会の心性―』（青土社、一九八五年）、野村純一「こんな晩への足取り」（『日本の世間話』、東京書籍、一九九五年、一一二―一四五頁）などを参照。
- (25) 竈神は日本の民俗文化における最も境界的な神格である。この点については飯島吉晴『竈神と廁神―異界と此の世の境―』（講談社「学術文庫」、二〇〇七年）を参照。
- (26) 前掲注（5）、一七五頁。
- (27) アジア世界におけるニワトリの問題は民族生物学的な観点からも深められるべきであろう。秋篠宮文仁編『鶏と人―民族生物学の視点から―』（小学館、二〇〇〇年）を参照。

